

令和7年度(第39回)山崎研究助成金伝達式 あいさつ

令和6年6月29日(日)

本日、研究助成を受けられた児童・生徒、教員の皆さん、受賞おめでとうございます。

私は、このたびの役員改選に伴い新しく代表理事に選任されました丹沢と申します。今後代表として、児童・生徒の科学研究と教師の教育研究支援に力を注いでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

挨拶に先立ちまして、本日は、公務ご多忙の中、静岡県教育委員会教育監小野田秀生(おのだひでき)様はじめ、研究助成選考委員会の委員長・副委員長様に臨席を賜りましたこと、心より感謝いたします。ありがとうございました。

さて、近年の日本の科学技術研究の現状として、その立ち遅れが指摘され、科学の応用、いわゆる日本の経済や社会・生活に役に立つ研究に多くの予算が、国や企業から支出されるようになりました。最近の例で言うと、ユニクロの柳井会長が45億円を寄付して、iPS細胞の研究施設「Yanai my iPS 製作所」が設立されたことが強く印象に残っています。これは、自分の血液からiPS細胞を迅速に作っていく施設であり、このこと自体歓迎すべき事柄なのですが、そこに至った経緯、つまり京都大学の山中伸弥教授によりiPS細胞の創出に成功したことが基盤にあるわけであり、彼の想像力に満ちた地道な基礎研究を忘れてはなりません。

基礎研究としての多様な研究基盤が、裾野として広く確立されていなければその応用も不可能であり、これこそが今の日本に必要なことであると私は考えています。しがって、役に立つかどうかはともかく、自身が抱いた疑問や興味に基づく研究や、自由な発想に基づく研究を、本財団としては今後とも積極的に支援していきたいと考えています。本日ここに出席する児童・生徒の皆さんの研究に対しては、選考委員の先生方から「身近なところにある疑問から、社会貢献に向けた研究」や、「地域課題や地球課題に対して何か貢献したいという思いあふれる研究」「長く継続している研究」「自分の興味関心を大事にした研究」といったコメントが寄せられ、高い評価を受けています。皆さんには、ここに選出されたことを、大いに誇りに思ってください、有意義な1年を過ごしていただけるよう願っています。そして受賞された教員の方々には、そのような児童・生徒を育成する理科のあり方を、大胆に提案いただけることを期待しています。

それでは皆さん、本研究助成による研究成果を、来年山崎賞に応募いただき、広く社会に伝えてください。来年再びここで会えることを楽しみにしています。

代表理事 丹沢哲郎